

りびんぐらいぶず 平成 26(2014)年1月第3号

方便法身のはたらき

ご議題

「**真実信心の称名は 弥陀回向の法なれば**
不回向となづけてぞ 自力の称念きはるる。
(Ref「正像末和讃」第三十九番 註釈版 P607、聖典全書宗祖篇上 P488),

はじめに

平成二十五年四月末発刊の新門様との対談形式になる「浄土真宗のこれから」の中で御門主は次のようにお述べ下さっていることは既にご紹介致しました。

私は現代人には「南無阿弥陀仏」は、感謝の念仏だと説く前に、阿弥陀さまが私を喚んでいただくお喚び声だと伝える方が理解され易いのではないかと最近感じています。

そうだとすれば、これを支える伝道教学が明確に確立されていなくてはなりません。

ところが、これまでのご常教教学次第では、「六字釈義」を除いては、勅命を中心に据えた説きぶりはなされていません。(Ref_「安心論題綱要」)

ならば、即座に現代社会 / 海外開教最前線に有効となるべき伝道教学確立に向けての果敢なお取組みが立ち上っても不思議ではありませんが、宗門内ではそのようなお取組みはないようです。これは宗門のマネジメントが曖昧だからではないかと危惧されます。

では、どうすればよいか、課題が明らかになったのなら、末寺末端でも決断して取り組めるものは取り組んでゆけばよいのです。

方便法身の方便の働き

「選択本願は浄土真宗なり、**浄土真宗は大乗のなかの至極なり**」と宗祖は、お同行を勇気づけるように仰せになっています。

浄土真宗というのは、愚痴蒙昧の衆生が如来様から賜る本願力回向のご法によって一人の例外もなくお救いに与ることができるおみのりだからです。

ところが衆生をお救い下さる救い主の本質は、いろもなくかたちもましまさぬ法性法身でいらっしゃいますから、まるで雲をつかむようなことになってしまいます。

そこで、衆生をしておみのりに遇わしめる為に、救い主は、方便法身となってお姿をお示し下さることになるのであります。

南無阿弥陀仏という六字のお名号も、阿弥陀如来が具体的に衆生に働きかけられるお姿ですからこれを方便法身と申します。

帰せよの命に疑いなく頭を垂れた衆生を抱き取ってすくとお立ち姿になって現れて下さった阿弥陀仏ですから南無阿弥陀仏の六字全体を方便法身と申すのであります。絵像・木像本尊は、文字をも知らぬ衆生が受け止め易いように「汝の救い主は私だよ」とお姿そのものとなって下さった方便法身です。

その意味で、お木像もご絵像もお名号も方便法身であることに変わりはありません。

共通するのは、佛自らの方から、お慈悲を表しお姿を示して働き出して下さる活動体だということでもあります。

方便法身は、佛の方より衆生の側に回向される仕方でお慈悲が届いて下さる佛の大慈悲の働きそのものだったのであります。

そのお心の次第に則して、南無阿弥陀仏のお名号が具体的に衆生の上に届いて下さる仕方は、間違いなく聞名ならしめんが為に、その者に南無阿弥陀仏と称えしめて南無阿弥陀仏と聞かしめる称名という具体的なプラクティス(口業 = くごう、口の行い)だったのであります。

称えることが自力そのものではない

南無阿弥陀仏と称えるプラクティスそのものが佛より回向されたご法だったのであります。ご讃題は、その法について謳われています。

「真実信心の称名は 不回向となづけてぞ	弥陀回向の法なれば 自力の称念きはるる。
--------------------------------	---------------------------------

真実信心の称名は、というのは、如来様から賜るまことのお心に疑いの蓋を差し挟むことなく、なるほどさようでございますかと頭を垂れて称えさせて戴く称名であります。

如来様が「さあ、称えてご覧」と願いを込めてお勧め下さっているのですから、さようならばと頭を垂れて申す称名であります。

この称名は、如来様の方から、衆生(私)に向かって回向して下さるご法ですから、衆生の側に立ってみれば、自ら称えてその功德を浄土往生(今生では“**摂取不捨(せつしゅふしゃ)**”)の**利益**)の為に佛の方に回向する必要がありません。

だから**不回向の行(ふえこうのぎょう)**と申すのであります。

この行は、お念仏以外の行と違って如来様の方から回向されている大行ですから、如来様の大悲のお心を知らずに、自らの力で称えてその功德を浄土往生のために積み上げ、行者の側から回向するということがあったとしたら、それは取り違えも甚だしいのでこれを厳しく戒められているのだということになります。

自力の称念きはるるとは、そのお心をおっしゃったものであります。

決して、念仏が直ちに自力に当たるとしてこれを排除されたものではなかったのです。

困ったことに、これ迄お西のご常教では、三業惑乱の影響で、信心獲得に先だってお念仏することが自力であるかのように説かれてきましたし、お東では、なぜかお念仏は黙念に限られてきました。

ならば、これを是正する教学を確認してゆけばよいだけではないでしょうか。

諸仏称名の願と至心信樂の願の仏意

行巻の標拳には諸仏称名の願として第十七願の願名が挙げられています。

第十七願の諸仏に**対して**誓われている行為「不悉咨嗟、称我名者(ふしつししゃ、しょうがみょうしゃ)」は、我名(=お名号)の功德を咨嗟(=ほめ讃える)した上で、実際に称えてみせることによって**これに習って衆生が**聞名に確実に遇わせて戴ける次第を示して下されると頂戴できる根拠の御文であります。

次に信巻の標拳には至心信樂の願として第十八願の願名が挙げられています。

第十七願の「称我名」の指し示すところに従って、第十八願の衆生に**対して**誓われている行為「乃至十念」を読み解かせて戴くならば、如来様から回向して下さる「南無阿弥陀仏と称える行為」が弥陀回向のご法となって届いて下ることが判ります。

衆生にとって必要なことは、「さあ、称えてご覧」と仰せ下さっている如来様の願いの通りに大行を大行と受け止めてお称え申せばよかったです。

こうして、衆生(私)がお念仏させて戴くとは、私自身が佛のお救いのお目当てだったとお聞かせに与ることになるのであります。

しかも、大行の届きぶりは、「私をタノミニセヨ、私にマカセヨ」と喚び給ふ(喚び続けて下さる)お喚び声に喚び覚まされる仕方であり、如来様が喚び続けて下さるご法ですから、乃至十念の「乃至」のなんとよく馴染むことでありましょう。

それゆえ、仰せのままに称えさせて戴くとき聞こえて下さる南無阿弥陀仏こそは、如来様直々のお喚び声なのであります。方便法身のお名号の具体的な方便の働きこそは、本願招喚の勅命となって届いて下さるお喚び声だったのであります。合掌。

ご法話会 二月 二日(日)夜八時より

なんでも質疑できるご法話会の妙味、質疑に対してはたと困っても熱心にお応え下さる布教使先生、その瞬間、私自身の課題を頂戴して取り組む住職、書き上げた回答の向こうに見えるものは、宗門や教学の抱える課題とその解決の方向であります。親鸞聖人のみ教えが世界へ子や孫に広がっていくように、新たなロジックの鍛錬にいそしんで参ります。

仏教婦人会例会 二月 十六日(日)十九時より

永代経 二月二十三日(日)十九時より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

電話 077-596-0166、Fax077-596-0196 住職 堅田 玄宥